

平成31年度
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

問題は次のページからです。

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) ネンガンがかなって旅行に出かける。
- (2) 失敗をキョウクンとして生かす。
- (3) 毒をもつ虫をタイジした。
- (4) かの女にはピアノのソシツがある。
- (5) この絵が本物だとはホシヨウできない。
- (6) 父がシュツチヨウでベトナムに行く。
- (7) ゴールスンゼンで追いぬき見事に一位となった。
- (8) 母は好みの服が見つかってヨロコんでいる。
- (9) 花だんの周りを木のさくでカコウ。
- (10) 外国に住むおばからタヨリが届く。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合により本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号(「、…、?等)も字数に数えます。

植物が美しい花を咲かせるのは、昆虫を呼び寄せて受粉させるためである。裸子植物は、風に乗せて花粉を運ぶ風媒花である。そのため、裸子植物の花は、花びらで装飾する必要がない。むしろ、風まかせで花粉を運ぶ方法は、雄花から雌花に花粉が届く確率は低い。花びらを作るような余計なことにエネルギーを使うよりも、少しでもたくさん花粉を作った方がよい。裸子植物が花粉を大量に生産するのは、そのためなのだ。

現代でもスギやヒノキなどの裸子植物が、大量の花粉をまき散らして、花粉症の原因として問題になるのは、裸子植物が風媒花だからなのである。

裸子植物から進化した被子植物も、もともとは風媒花であつたと考えられるが、子房が発達するとほとんど同時に、昆虫が花粉を運ぶ虫媒花が発達したと考えられている。

もちろん、昆虫も植物の花粉を運んでやろうという親切心で、花にやってきたわけではない。昆虫は花粉を餌にするために、花にやってきた。つまり、

A

被子植物は花粉を捕えるために、雌しべを長く伸ばす。花粉を食べにやってきた昆虫に付着した花粉は、昆虫が別の花を訪れると、偶然、その雌しべに付着したのだろう。そして、昆虫によつて、花粉が運ばれたのである。

昆虫は花から花へと移動するから、昆虫に花粉を運ばせることができれば、極めて効率がよい。少しぐらい昆虫に花粉を食べられたとしても、どこへ飛んでいくか分からない風まかせの送粉方法に比べれば、ずっと確実である。そのため、昆虫に報酬として花粉を食べさせたとしても、生産する花粉の量をずっと少なくすることができたのである。

そして花粉生産を節約した分のエネルギーを使って、昆虫を呼び寄せるための花びらを発達させた。そして、ついには甘い蜜を用意し、芳醇な香りを漂わせて、あの手こ

の手で昆虫を呼び寄せるようになったのである。そして、私たちが知る美しい花が誕生したのだ。

このように花が劇的に進化できたのは、子房を持った被子植物が、世代更新のスピードを早めることに成功していたからなのだ。

昆虫は植物から蜜や花粉をもらい、代わりに植物は昆虫に花粉を運んでもらう。この相思相愛の共生関係の進化の過程で、最初に花粉を運んだ昆虫は、コガネムシの仲間であつたと考えられている。言わば、植物にとっては初恋の相手である。

しかし、初恋というものが、どこか不器用でスマートさに欠けるのは、植物の進化でも同じである。現代でも、コガネムシはけっして器用な昆虫ではない。墜落したかと思ふほど、ドスンと花に着陸し、餌の花粉を食べあさって花の中を動き回る。植物と昆虫の共生関係は、最初はこんなスタートだったのである。

こうして植物の花が発達するに連れて、花から花へと華麗に飛び回るチョウやハチなどの昆虫が進化を遂げて行

つたのである。

チョウやハチと言えば、人間にとってはチョウの方が人気があるかも知れないが、植物にとってはチョウはけっして良い存在ではない。チョウは長い足で花に止まり、ストロークのような長い口で蜜を吸う。そのため、チョウの体には花粉がつきにくいのである。植物にとってチョウは、花粉を運ぶことなく、蜜だけ吸っていく蜜泥棒なのである。

一方、ハチは植物にとって最良のパートナーである。何しろハチは働き者である。ミツバチのような社会性の昆虫は、家族を養わなければならぬから、とにかく忙しうに花から花へと飛び回る。それだけ、花の花粉も運ばれるということなのだ。

a ハチの仲間は頭が良い。そのため、花の色や形を認識して、同じ種類の花を飛び回る。これは、植物にとっては、極めて都合が良い。何しろ、花から花へと飛び回ると言っても、違う種類の花に飛んで行ってしまつては受粉をすることができない。その点、ハチは同じ種類の花へ飛んで行ってくれるから、効率が良いのである。

b、植物の花は、ハチを呼び寄せようと必死だ。

そして、ますます花を美しく装飾し、たっぷり蜜を用意して、ハチを誘っているのである。

c、問題もある。ハチのために奮発して用意した蜜を狙って、さまざまな昆虫が花にやってきてしまうのである。④ どうすれば、他の昆虫を拒み、ハチだけに蜜を与えることができるのだろうか。

もし、あなたが植物の花だったら、どのような工夫をするだろうか？

高校や大学は、受験生を集めるために、あの手この手で魅力を発信する。しかし、そう言いながらも、すべての受験生が入学できるわけではない。高校や大学が望む生徒を選ぶためにテストを行うのだ。

植物も同じである。

植物は、ハチを選ぶためにテストをすることを考えた。

先述のように、ハチは頭が良い。そこで、植物は花の奥深くに蜜を隠し、花の形を複雑にして簡単には蜜にたどりつけないようにしたのである。そして、花びらに蜜標と呼

れる蜜のありかを示す目印となる模様をつけた。この蜜標の謎を解き、複雑な花の形を理解する頭の良い昆虫だけが、蜜にたどりつくことができるようにしたのである。

そしてハチは狭い花の中に潜り込み、後ずさりして花から出てくることのできる。じつは、後ずさりして花から出てくるといふ動きが、他の昆虫にはなかなかできないのだ。

ハチが後ずさり得意だから、花が狭い形に進化をしたのか、あるいは花が狭い形に進化をしたから、ハチが後ずさりするように進化を遂げたのかは、わからない。おそらく

くは花がハチにだけ蜜を与えようとし、ハチがその花から蜜を吸おうと、お互いに進化を遂げていく中で、花の蜜を吸うハチと、ハチだけに蜜を与える花が発達したのでろう。

しかし、結果として花はハチだけが潜り込みやすいような形になり、ハチは花に潜り込みやすいような形になって

いる。すると、ハチが同じ花だけを選んで花粉を運んでくれる理由も見えてくる。

ハチも慈善事業ではないから、植物のためにわざわざ同

じ花を選んで回るようなことはしない。しかし、ハチは謎を解き、複雑な形に侵入して苦勞して蜜にたどりつく、同じ仕組みで蜜を得られる花に行きたくなる。植物のテストをクリアしたハチにとって、同じ種類の花は、過去問とまったく同じ問題を出題する入学試験のようなものだ。だから、ハチは他の花には見向きもせず、同じ種類の花へと飛んでいくのである。

花とハチとの関係は、「B 関係」と言われるが、自然界の生き物は助け合うようなことはしない。花もハチも利己的に、自分の都合の良いように振舞っているだけである。しかし、そんな自分勝手な生き物たちが、お互いに損することなく、お互いに得するようなくみを作り上げている。それが、人間の目には助け合っているように見えるのだ。

自然の営みというのは、本当にすごいものである。

(稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』)

弱くて強い植物のはなし『筑摩書房』

※芳醇……かおりが高く、味がよいこと。

問一 —— 線①とありますが、別の方法で花粉を運ぶ

花にはどのようなものがありますか。本文中から十
一字でぬき出しなさい。

問二 —— 線Ⅰ「花粉」、Ⅱ「生産」と同じ構成の熟語

を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、計測 イ、冷水 ウ、日照 エ、天地
オ、消火

問三 A に入る最も適当な一文を次から選び、

記号で答えなさい。

ア、親切心は、昆虫に花粉を提供する花が持っていた
のである。

イ、もともと昆虫は、植物の花にとっては害虫だった
のである。

ウ、花粉を作る花が、昆虫をこの世に存在させたので
ある。

エ、昆虫が花を育てようという意識がそこに働いてい
るのである。

問四 ——— 線②とありますが、「花が劇的に進化」した

のは何のためですか。これより前の部分から十五字
でぬき出しなさい。

問七 ——— 線④とありますが、こうなるために植物と

ハチはどのように進化していったと考えられます
か。それを説明した次の文の [1] [2] [3]

問五 ——— 線③とありますが、

(1) 筆者は植物にとってチョウはどういう存在だと表

現していますか。本文中から三字でぬき出しなさい。

(2) (1)のように表現するのはなぜですか。チョウの体

の特徴に触れて六十字以内で答えなさい。

問六 [a] [b] [c] に入る適当な語句を次からそれぞれ

れ選び、記号で答えなさい。

ア、しかし イ、そのため ウ、つまり

エ、しかも

[1] [2] [3] に入る適当な言葉を、本文中からそれぞれ一語
でぬき出しなさい。二カ所ある [1] [2] には同
じ言葉が入ります。

植物は花の形をできるだけ [1] にして
[2] を奥おくに隠し、他の昆虫を寄せつけな
いように進化し、ハチは [2] にたどり着
くために [3] ができるように進化した。

問八 [B] に入る適当な言葉を、本文中から二字でぬ

き出して答えなさい。

問九 次のうち、本文の内容からみて適当なものにはAを、

適当でないものにはBを解答らんに記入しなさい。

ア、昆虫が花粉を食べにやって来るのは同時に花粉を他の花に運んであげるためでもある。

イ、スギやヒノキなどの裸子植物が大量の花粉をまき散らすのは、昆虫を引きつけるためである。

ウ、ハチは親切心で花粉を運ぶわけではないが、結果的に花にとって好都合な花粉の運び手になっている。

エ、最初に花粉を運んだのはコガネムシの仲間であるが、今ではその役割はチョウやハチに代わってしまった。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合により本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号(「、…、?等)も字数に数えます。

《主な登場人物》

わたし……………高校一年生。

美和ちゃん……………大学院生で、「わたし」の家庭教師。

富田くん……………「わたし」の仲の良いクラスメイト。

村上さん……………美和ちゃんの恋人。

ある日四人は、村上さんの車で遊園地に遊びに行った。次の

文章はその数日後の場面である。

「なんか今日、元気ないね?」

わたしのノートを点検しながら、美和ちゃんは言った。

「遊園地で疲れちゃった?」

美和ちゃんに言われるまでもなく、自分がひどい顔をしているのは知っていた。ちつともパワーがわいてこない、

その原因ははつきりしている。富田くんと、もう三日も口

をきいていない。

遊園地に行った次の日の放課後も、わたしたちはいつものようにアトリエに寄り道した。すつかりおなじみになった近所の公園のベンチには、やわらかい陽ざしがふりそそいでいる。並んでパンをかじっていると、すずめが何羽か寄ってきて、せわしくなくパンくずをつつき始めた。

「遊園地、楽しかったね」

わたしが言うと、うんうん、と富田くんもうなずいた。

「美和さんも村上さんも、いい感じだったし」

パンが口いっぱいに入っているの、みあはんもむらほみはんも、と聞こえる。口をもぐもぐさせる足元のすずめと富田くんの横顔を見比べて、わたしは思わず笑ってしまった。

「いい感じだよね、ほんと」

わたしも心から同意する。美和ちゃんと村上さんの組み合わせは、絶妙だと思う。わたしたちもあのふたりみたいになれたらいいね、と言いたかったけれど、恥ずかしくなつて、わざと違うことを言った。

「……やっぱりいいね、大学生って」

「あの車！ バイトでお金ためて買ったんだって。いいよなあ……」

どうやら富田くんがうらやましかつたのは、そこらしい。わたしは少しがっかりしたような、でも逆に A したような、ちよつと複雑な気持ちになる。

わたしたちが大学生になったら、どんなふうだろう。一緒に地元の大学に進んで、今みたいになくちよくパンを食べに行けたらいいのに。あ、でも、もし東京に出るとしたら、有名なお店を食べ歩けるかも。美和ちゃんがいつも じまん しているように、大学生は平日の昼間に歩けるから、お

昼に焼きたてのパンを買える。そうだ、自由な時間が増えるだろうから、パン屋さんでバイトもしたい。わたしたちももつと長く一緒にいたら、美和ちゃんと村上さんのようにすてきなカップルになれるだろうか……つきあってもいいのに、最近わたしの想像力がよく暴走するのは、美和ちゃんや さとこ 聡子にけしかけられているせいかもしれない。

つらつらと考えながら となり 隣の富田くんをうかがうと、早

25

くもふたつめのパンにとりかかっている。

「富田くんは、大学に入ったらなにがしたい？」

何気なく聞いたのは、自然ななりゆきだったと思う。文系なのか理系なのか、志望の大学はもう決まっているのか、そんな内容を予想していたから、返ってきた答えを聞いてびっくりした。

「あ、おれ、大学は行かないかも」

富田くんは、あっさりと言った。

「フランスにパンの修業に行きたいんだ」

別にあの店を継ぎたいとかつていうんじゃないけど、やっぱり本場を見てみたいっていうのがあるんだよなあ。

「親父の知り合いもけっこういるみたいだし」

そうだよ、とわたしはぼんやりとあいづちをうつ。富

田くんの想像する未来に、わたしはいない。① ついさつきま ひとしげ での楽しい想像は一瞬でふきとび、ばかみたい、とわたしは心の中でつぶやいた。ひとり舞い上がっちゃって、ばかみたい。

「どこがいいのかな、やっぱりパリかな？」

60

50

富田くんが悪いわけじゃない。でも、目をきらきらさせながら将来の計画を語る富田くんを、わたしは少し恨んだ。そんなにも期待に満ちた、楽しそうな顔をすることはないのに。

「行きたい大学とかもう決めてるの？」

② まるで他人ごとのような聞きかただ。まあ、他人ですけれど。最初のショックが過ぎると、わたしは **a** な気持ちになつてきた。

③ 「ううん、でもとりあえずどこかに入って、いっぱい遊ぶ」

「ふうん」

一応話を続けながらも、富田くんはパンの袋をがさごそと探り、

「お、新作だ」

なんて言う。

「ちよつと味見する？」

すでにパンのほうにすっかり気をとられている様子なのが、 **b** にさわった。

「富田くんも大学くらいは出といたほうがいいんじゃない

の？」

自分の声がかつてるのがわかった。

「うーん、でもやりたいこともないのに適当に大学入つてもなあ」

④ 富田くんは、のんびりと首をかしげている。

「あんまり夢みがちなのも大変だよ？」

われながら、 **c** な言いかたになつた。本当はこんなことを言いたいんじゃないのに、言葉が勝手にこぼれてしまう。富田くんが、びっくりしたようにこつちを見た。

「どうしたの？」

別に、と返したけれど、もう遅かつた。空気が変にゆるんでしまっている。富田くんは不意に立ち上がり、少し離れたゴミ箱に勢いよくアトリエの紙袋を投げ捨てた。ぱん、と乾いた音がする。

「別におれ、夢をみてるつもりじゃないんだけどなー」

「そういう意味で言ったんじゃないよ」

否定したものの、あまり心がこもっているようには響かなかつた。

問一 A に入る適当な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、心配 イ、落胆らくたん ウ、沈黙ちんもく エ、安心

問二 ———— 線①とありますが、ここでいう「想像」とはどこから始まりますか。本文中から一文をぬき出して答えなさい。

問三 ———— 線②とありますが、何が「ショック」なのですか。二十五字以内で答えなさい。

問四 a c に入る適当な言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、投げやり イ、微妙びみょう ウ、意地悪
エ、しやく

問五 ———— 線③とありますが、このような考えで大学に通う人のことを富田くんはどのように表現していますか。本文中から六字でぬき出しなさい。

問六 ———— 線④とありますが、どのようなことを「夢みがち」と言っているのですか。二十五字以内で答えなさい。

問七 ———— 線⑤とありますが、この一文はどのようなことを暗に表していると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、わたしと富田くんの気持ちがすれちがっている様子。
イ、悲しみのためにわたしの目がうるんでいる様子。
ウ、夕日が沈しずんで一気に暗くなっていく様子。
エ、富田くんがおこつて足早に去る様子。

問八 本文冒頭部ぼうとうぶに————— 線☆とありますが、なぜそうなってしまったのですか。三十五字以内で答えなさい。

問九

本文から読み取れる「わたし」の気持ちを考えた上で、あなたならこの後、「わたし」にどのような声をかけてあげますか。その言葉をかけた理由も合わせて答えなさい。

以下白紙です。